

論文

ダム・ディベート

——サンフランシスコの水源開発にともなう景観価値と国立公園——

森 下 直 紀*

はじめに

現在、サンフランシスコ湾岸一帯に水を供給する最大級のものとして、ヘッチ・ヘッチ水道 (Hetch Hetchy Water System) がある。この水道は、サンフランシスコ市から約 150 マイル (240Km) 西方のシエラ・ネバダ山脈に3つのダムをヘッチ・ヘッチ渓谷、エレノア湖、そしてチェリー渓谷に建設し、そこで蓄えられる氷河の雪解け水を供給する目的で建設された。1934年に水の供給が開始されるヘッチ・ヘッチ水道は、1860年代からはじまったサンフランシスコ水道公営化の思潮——50年間、サンフランシスコ市に住む市民の総てに安定して十分な量の綺麗な水を安価に供給することを求め、そのためには公的に運営される水道事業が望ましいとして、その実現を求めていったこと——の一つの帰結であった。

1900年に市憲章の改正によって正式にサンフランシスコ市の方針として市営による水道事業を整備すること、そして将来にわたって安定した水源を整備することが決定されるやいなや、シエラ・ネバダ山脈から水を供給する水道計画が起草された。しかし、この計画の実現までの期間からも予想できる通り、この計画が提起され実現することは容易ではなかった。その最大の要因は、水源として想定された場所が国立公園内であったということである。

1900年代までにアメリカ合衆国ではイエローストーン国立公園をはじめ複数の国立公園が設立され、また多くの大規模な国有林 (National Forest Reserve) が設定されていた。というのも、流入し続ける移民たちがそれまで存在していた自然景観や動植物の営みを短期間のうちに大きく変容させ、そして資源問題を引き起こしはじめたからである。その反省に立つ世論に後押しされて連邦政府は自由な開発を制限したり、政府の監督下でしか開発がおこなえないような地域を指定した。こうして創設された各種の「開発抑制地域」は、現在も国立公園や国有林などに代表される造営物型の自然保護地域として維持されており、合衆国国土の約5%の面積を占めている。

1903年に、サンフランシスコ市が水道供給の水源としてヨセミテ国立公園にダムを建設するように求めた際、国立公園を所管するヒッチコック内務長官はヨセミテ国立公園の設立趣旨に照らしてダムの建設は許可できないことを明言した。

(ヨセミテ国立公園において) もしエレノア湖やヘッチ・ヘッチ渓谷の特徴が、法の下に長官が保護すべき程のものではないならば、ヨセミテ渓谷そのものにおいて他に内務長官が保護すべき自然状態を見つけ出すことは困難である。(Hitchcock, 1905: 130)

しかし、ヒッチコック長官 (E. A. Hitchcock) のように国立公園の守護者とも言える内務長官がいた一方で、この事例に関った5人の長官のうち、このヒッチコックを除いては積極・消極はありつつも国立公園の開発には肯定的であった。そして、内務長官の意見が一様でないことから、国立公園という制度はいったいどのようなものであり、ま

キーワード：公営水道事業、ヨセミテ国立公園、環境保護運動、自然景観の改変、ダム開発

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 生命領域

たどうあるべきなのかという争点においてこの事例が果たした役割は大きい。その意味で、この事例は国立公園の開発をめぐるダム・ディベートと呼ぶにふさわしいものである。同時に、このディベートは国立公園が内務省の管轄下にあることから、行政手続上どのようにダム開発を認めるべきかという問題を含んでいた。したがって、この事例以降の国立公園の制度と在り方に大きな影響を及ぼしたことは明らかであり、この点を明らかにする必要があった。

他方、環境思想史や環境倫理学の分野では、この事例を自然保護地域の開発と保護という二項対立の図式に展開し、それぞれの立場を表す思潮として「保全 (Conservation)」と「保存 (Preservation)」という自然保護をめぐる思想対立の問題と捉えてきた。

「保存」派として中心的に闘ったのはミュアであった。(…) 原生自然に対して人の手を入れることに反対を唱えた。それに対するピンショーは、適切な管理をしながら賢明な利用をしていくという「保全」の基本原則に則る形で、結局は建設を認める対応をとり、長年の論争の末に行われた下院の聴聞会でもそのように証言した。この論争は、1913年に最終的に建設が認められることで決着した。「保存」派は、この時代においては、「保全」派との対立の中で敗北を喫したのである。(鬼頭, 1996:48-9)

この見解は、ナッシュ (Roderick F. Nash) はこの問題をウィルダネス (原生自然) と文明の衝突として捉え (Nash, 1967)、ジョーンズ (Holway R. Jones) によるウィルダネスを保護しようとした「保存主義者」の描写が (Jones, 1965)、70年代の環境主義の興隆によって強く受け入れられたからと考えられる。そして、ウィルダネスを守る「保存」と、自然の管理・利用という「保全」という二項対立的な図式が採用されてきた。

他方のライター (Robert W. Righter) は、この論争がウィルダネスをめぐる争いではないとして「保全」と「保存」との対立図式を退けた (Righter, 2005: 6)。しかしライターはこの対立図式を退けつつも、ミュア (John Muir) とピンショー (Gifford Pinchot) という人物対立は、温存しようとした。ライターは、ヘイズ (Samuel P. Hays) と同様にこの争いを当時の革新主義の伝統のなかに還元する (Hays, 1959)。すなわち西部開拓がもたらした無秩序な自由主義が生んだ巨大資本グループによる水道インフラ支配から住民を解放したと主張するのである。そして、革新主義のピンショーと自然保護主義のミュアという対立を描こうとした。確かにピンショーはサンフランシスコ市のダム計画に反対の立場を取っていなかったし、革新主義の中心的な推進者としてルーズベルト政権を支えたといわれている。しかしライターに限らず、この事例においてピンショーの立場は十分に明らかにされてきたとは言いがたい、というのもピンショーはこの問題が一般の耳目を集めるようになった1908年当時、国有林を管轄する森林局長であり国立公園の開発問題に対して決定権を持つ立場ではなかった。他方のミュアは、当初から自ら代表を務めたシエラ・クラブ (Sierra Club) を率いて反対運動を展開した。しかし、クラブ内の意見対立やミュア自身のより柔軟な見解によって、やがてミュアは反対運動の中心ではなくなっていく。

実際には何が争点となっていたのか。これまでの研究では、この事例における景観価値についての議論に焦点が当てられることはなかった。なぜならば、ヘッチ・ヘッチイという有数の景勝地にダムを建設することに反対する人々が、ダムが景観に与える影響について無関心であるはずがないと考えられてきたし、またダムとそのダム湖は景観の価値という観点から認めがたいものだと思われてきたからである。

以上の争点について、この国立公園のダム開発をめぐる議論を時系列的に追いながら、このダム・ディベートによって何が争われたのか——保護すべきとされたのは国立公園なのか、自然景観なのか、あるいは功利的な価値判断によるものか——を明らかにすることを試みた。

1 収斂する保護対象：国立公園保護からヘッチ・ヘッチイ渓谷の保護へ

20世紀に入ってサンフランシスコ市は、サンフランシスコ湾を同市から北方にまたぐ金門橋と東方にまたぐ湾橋によって、同市から北と東に交通路を切り開くという巨大プロジェクトが進行していた。この華々しい事業の裏で、150マイル離れたシエラ・ネバダ山脈の水源から市の水道を供給するというもう一つの計画を発動させた。西部開拓

から引き続く人口増加によって、サンフランシスコ湾に突き出した半島上のサンフランシスコ市は潜在的な水の供給問題を抱えていた。そして、1914年のパナマ運河の完成をひかえますます増大するであろう人口に対応するために、1900年の市憲章改定によって安定した公共水道の所有を決定したのである。しかし、この計画の実現までには30年以上もの年月と莫大な税金、そして全米の一市民から連邦議会議員に至るまで多くの人々による議論の対象となった。

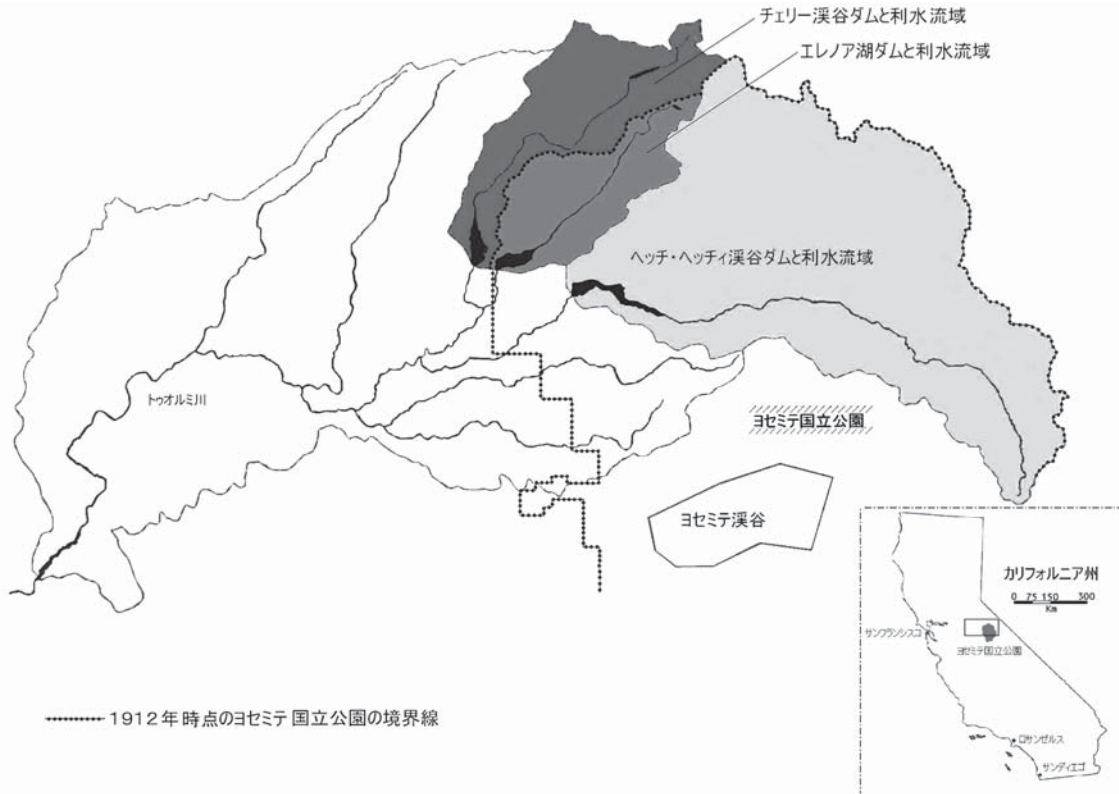


図 トウオルミ川流域のダムとそれぞれの利水流域 (Freeman, 1912: 24 をもとに著者作成)

従来からこの地に水を供給していたのは、後にスプリング・バレー水道社 (the Spring Valley Water Company) として統合される複数の私企業であった。それ以前は主に井戸水が利用され、少し後には対岸から船で水が運ばれ市中で販売されていた (O'Shaughnessy, 1925: 5)。1858年にサンフランシスコ水道 (the San Francisco Water Works) がはじめて水道を市に供給して以来、市は独自の水道インフラを所有していなかった (O'Shaughnessy, 1925: 5)。そして1865年頃から、市の年次報告書には毎年のように防災上の水インフラの整備が不足していることを示す報告がなされている (Board of Supervisors, 1866)。そして、水道企業と市との関係は69年を皮切りに数多くの主に利用料をめぐる訴訟によって悪化していくことから (Board of Supervisors, 1869)、最終的に1874年のオーティス市長 (James Otis) によってガスや水道の公営化を求める動きが始まる (Board of Supervisors, 1874)。1900年の市憲章の改正はこの動きを市の方針として確定的にしたものであるが、オーティス市長の意向を受けて水源調査費の計上と関連の法整備が始まる (Board of Supervisors, 1874)。最終的に市が水源候補地を決定したのは、市のエンジニアのグランスキー (C. E. Grunsky) によって1901年に立案されたヨセミテ国立公園内のヘッチ・ヘッチイ溪谷とエレノア湖の双方にダムを建設し、パイプラインによって市に水を引くというものであった (Board of Supervisors, 1901)。

この方針にしたがって、当時の市長フェラン (James Phelan) は1901年10月16日にヘッチ・ヘッチイ溪谷とエレノア湖にダム建設の権利をストックトン土地事務所 (Stockton Land Office) に申請した (Board of Supervisors, 1908: 109)。しかし、1903年1月20日に国立公園を管轄するヒッチコック内務長官はこの申請を退けた (Board of Supervisors, 1908: 113-5)。サンフランシスコ市はその後も繰り返し申請をおこなったが内務省のかたくなな姿勢は維持され、フェランの後を受けたシュミッツ (Eugene E. Schmitz) が市長に就任するころには国立公園への関心を

失っていた。市議会は1906年2月3日の決議第6949を可決し、ヘッチ・ヘッチィに対する試みを放棄して他の水源を調査することを決定した (Taylor, 1926: 60-1)。

しかしこの決議にも関わらず、サンフランシスコ市はヨセミテ国立公園への関心をまもなく回復する。その背景には前市長フェランのあくなきこだわりと、自然災害に起因する市民意識の変化があった。1906年4月18日の未明、大地震が同地を襲った。地震の影響で地下に埋設されていた水道管が破壊され消火栓から水がでなかったことから、地震後の火災の被害を拡大した。スプリング・バレー水道社の防災インフラについては、かねてより批判があったことから同社に対する市民の不信が広がった。実際、地震の数日後には水道委員連合 (the Federated Water Committee) がホイヤー (W. H. Heuer) を中心とした市民グループによって組織され、同社を市が買収するように求めた (Jones, 1965: 92)。そしてフェランは、ヒッチコック長官の決断がサンフランシスコの災厄をもたらしたと公に非難し、国立公園内のダム開発に対する有権者の関心を喚起した (*San Francisco Call*, 25 December 1906: 11)。

また、フェランを中心としたグループは彼らの人脈を利用して水面下での交渉を続けていた。市のエンジニアのマンソン (Marsden Manson) は、友人のピンショ어의助力でルーズベルト大統領 (Theodore Roosevelt) に面会している。その成果は、ピンショ어가1905年2月17日にシエラ・クラブのコルビィ (William E. Colby) に書き送った手紙の内容に現れている。この手紙の内容は、カリフォルニア選出の下院議員ニードハム (James C. Needham) の要請によって秘匿するように厳命されたためコルビィにも公にしてはならないと指摘した上で、ルーズベルト大統領に以下のように勧告したことを明らかにした。

1. サンフランシスコ市が必要な権利を取得し、必要な申請をおこなった場合すみやかにエレノア湖の使用を認める
2. ヘッチ・ヘッチィのダム候補地は、サンフランシスコとその周囲の市の将来的な使用に備え、その必要が明らかになった際に提供される (letter from Gifford Pinchot to William Colby, 17 February 1905, qtd. Jones, 1965: 92-3)

この勧告は、コルビィがピンショ어に書き送った2月10日の手紙の内容とほとんど同じものだとピンショ어は考えていた。そして、ピンショ어はサンフランシスコが十分な水の供給を得なくてはならず、その点においてヒッチコック長官は杓子定規的で状況を的確に判断していないと批判した (Jones, 1965: 92-3)。しかし一方で、ピンショ어はヘッチ・ヘッチィの元の美しさを保持したいというコルビィの意見に賛同し、ヘッチ・ヘッチィを開発するまでに少なくとも50年、場合によっては100年の猶予があると考えていることを示した (Jones, 1965: 92-3)。

大地震の後、ヨセミテ公園内にダムを開発する計画を復活させた市当局は、1905年7月27日に国立公園を開発することを求める申請書を再度提出した (Jones, 1965: 93)。しかし、ヒッチコックが決断を下す前に辞職したことで、この申請の判断は後任のガーフィールド長官 (James R. Garfield) に委ねられた。同長官は1907年7月27日に聴聞会を開き、最終的に1908年5月11日に条件付ながら国立公園内のダム開発の許可を出した (Garfield, 1908: 219)。

この許可に先立ってミューアはルーズベルト大統領宛に手紙を書き、大統領にエレノア湖のみをサンフランシスコ市に与えるように要請した。ガーフィールドの許可はこの要請に最大限配慮し、ヨセミテ国立公園に計画されている二つのダム建設予定地であるエレノア湖とヘッチ・ヘッチィ渓谷の内エレノア湖を優先的に開発し、その後ヘッチ・ヘッチィ渓谷を開発する必要が生じたことをサンフランシスコ市が証明できれば開発を認めるというものであった (John Muir to President Theodore Roosevelt, 21 April 1908, Qtd. Righter, 2005: 70)。さらにシエラ・クラブは1907年8月30日に理事会を開き、キャンプ場が失われ旅行者が損害をこうむること、そしてヨセミテ国立公園にとって最大の景勝地であるヨセミテ渓谷をダム化すること以外での最大の損失を与えることを訴えた。さらに、ヘッチ・ヘッチィ渓谷をダム化することに用いられる論理はすべてヨセミテ渓谷に対しても有効であり、ヨセミテ渓谷が将来ダム化される恐れが生じる。これを回避するために、サンフランシスコの申請を却下するよう求める決議文がガーフィールド長官に送られた (Qtd. Jones, 1965: 95-6)。この決議はシエラ・クラブがサンフランシスコの計画に対し

で最初におこなった公式な行動であった (Jones, 1965: 95)。

しかし、ミューアたちはヒッチコック長官が示した開発を否定する最大の理由を、すでにこの時点で放棄してしまっていた。すなわち、ヒッチコック長官が国立公園の設立趣旨に照らして公園のダム開発は認められないとしたにも関わらず、ミューアはエレノア湖の開発を是認することによって国立公園内のダム開発そのものについては肯定的な立場を取ることになった。したがって、ミューアはそれ以後国立公園におけるダム開発に反対の姿勢をとらず、ヨセミテ国立公園のダム建設予定地の内ヘッチ・ヘッチィ渓谷におけるダム開発に対して反対運動を展開していくことになる。

2 ガーフィールド内務長官の建設認可と反対運動の開始

ミューアは「自然保護の父」とも呼ばれている。この問題が立ち上がる以前に、ルーズベルト大統領の要請で一緒にヨセミテ国立公園を旅したこともあった。自然随筆を数多く残しており、自然随筆の分野では当時最も著名な人物であり、東部の人々に西部の自然を東部に知らしめる役割を担っていた。さらに、当時政府が推進していた「開発抑制地域」の設定に協力し、国有林の設立にも大きな貢献を果たしていた (岡島, 1990 :52-64)。サンフランシスコ市の計画には、ヨセミテ国立公園以外にも隣接するスタニスラウス国有林にダム建設に伴う水道管・道路・電線などの建設計画が含まれており、ミューアとしてはこちらも合わせて反対するのが筋であった。将来の安定した水道供給のためにはダムの開発は止むを得ないとしても、ヨセミテ公園を開発することは認められない、という主張内容となるはずであった。

ガーフィールド長官の開発許可はピンショーも関ったルーズベルト大統領への勧告やミューアの思惑を汲む形で、ヘッチ・ヘッチィ渓谷の開発に留保をつけた開発許可となっていた。ミューアはその決定に失望したが、予想していたことでもあり、すぐさまヘッチ・ヘッチィが開発の対象となるわけではないという事実に安堵してもいた (Righter, 2005: 71)。

ルーズベルト大統領はヘッチ・ヘッチィの開発を遅らせるという配慮を示したものの、同時にサンフランシスコ湾一帯にまたがる広域水道開発に対しては適切な水道インフラを与えなくてはならないとも述べており、ヘッチ・ヘッチィ渓谷の開発を完全に止めさせるためには世論の支持が必要であると述べている (Worster, 2008: 427)。ミューアはこの忠告に従い、雑誌『センチュリー』誌のオルムステッド (Frederick L. Olmsted) やシエラ・クラブでミューアを支えたコルビィとともに、全米で反対運動を展開していくことになる。この運動の影響によってヘッチ・ヘッチィは全米にその名を知られるようになり、さらに後世にこの問題が開発と保護という観点において参照されるようになった要因がある。

ガーフィールド長官はサンフランシスコの請願書を受領してからわずか4日後、サンフランシスコの利水目的のための施設の建設と保有を認めた。この決定に際して、市が「世論のヘッチ・ヘッチィ渓谷に向ける関心に鑑み、可能な限り長くその使用を遅らせると表明したことに後押しされた」(Garfield, 1908: 219) と許可に踏み切った理由を述べている。しかし事態はここで決着しなかった。ガーフィールドの許可を受けて具体的なダムの建設が始まるためには、サンフランシスコ市はダムの建設許可の他に、ダム湖となる場所とパイプラインや発電所が建設される土地の権利を取得する必要がある。そして、この計画が予定している土地の多くは国立公園をはじめとする国有地が多く含まれていたため、国有地をサンフランシスコ市に譲渡する法律が必要であった。

1908年5月16日、ガーフィールド長官の許可から5日後、カリフォルニア選出のカーン下院議員 (Julius Kahn) は、サンフランシスコ市と連邦政府の間で土地を交換することを定める法案を提出した。この法案に関する聴聞会が下院公有地委員会によって1908年12月16日から翌年の1月12日まで開催された。これにより初めてこの問題が議事堂の中に持ち込まれた。

聴聞会に先立って開催された1908年の全米知事会議 (Conference of Governors) にシエラ・クラブは招かれなかったが、クラブから参加者に挨拶状が送付された。1908年5月2日付けのこの挨拶状には、アメリカの自然が景観資源としての経済的な価値があり、この価値を享受する旅行者の権利を保護しなければならないと記されていた (Righter, 2005: 72)。シエラ・クラブと共同歩調をとっていたアメリカ地域移民センター (American Civic Association) のマ

クファーランド (J. Horace McFarland) は、参加した知事たちに対して「ヨセミテ地域におけるヘッチ・ヘッチイ溪谷は全てのアメリカ人に属し、サンフランシスコ単体のものではない」(Qtd. Huth, 1972: 187) と演説し、溪谷を保護するための理解を訴えた。しかし、こうした主張に対する知事たちの反応として、非公式に会議に出席していた『センチュリー』誌のジョンソン (Robert U. Johnson) は、参加者の一般的な意見として開発計画に対する反対者は「全て感情主義者と考えられている」と報告した (Righter, 2005: 73)。すなわち、計画に反対する人たちのヘッチ・ヘッチイ溪谷の利用方法を旅行者による景観利用とする主張は、知事たちには受け入れられていなかった。

溪谷の開発に反対する人々は、自分たちの主張が政治家にとって受け入れがたいことが明らかになったことで、ルーズベルト大統領が示唆したようにヘッチ・ヘッチイ溪谷の保護を求める世論を喚起することの重要性を再認識した。開発反対を国民世論へと展開するためには、きわめて組織的な動きが求められた。しかし、シエラ・クラブはこの問題に関して一枚岩ではなかった。象徴的なのは、サンフランシスコ市の開発計画を主導した市のエンジニアのマンソンもメンバーであったことである。したがって、シエラ・クラブという組織体として反対運動を展開することは不可能であった。ガーフィールド長官の開発許可の直後の時期までは、シエラ・クラブによってミューアが作成したパンフレット、『ジェームズ・ガーフィールド長官からの手紙への返信：破壊的なヘッチ・ヘッチイの計画との関係で』が発行されたが、すぐに発行元は国立公園保護協会にとってかわる。その後、この協会から『ヘッチ・ヘッチイ溪谷を守ろう』や『ヨセミテ公園を破壊から守ろう』、そして『有名なヘッチ・ヘッチイ溪谷を助けよう』といったパンフレットが発行された。その部数や配布時期を確定することは困難とされるが、これらのパンフレットが西部及び東部の中産階級の多くの人々に届けられたという (William Colby Memorial Library, box #3, Sierra Club, see also, Righter, 2005: 73-4)。

しかし、この新たな国立公園保護協会とて問題を抱えていた。それは 1909 年 1 月 26 日付のサンフランシスコ・コール紙に掲載された、ガーフィールド内務長官からミューアへ宛てた手紙の内容に現れている。これはパンフレット『ヘッチ・ヘッチイ溪谷を守ろう』の内容に対するガーフィールドの反論であった。パンフレットは「許可は溪谷を破壊するだけでなく、水源の汚染を防ぐためヨセミテ溪谷の半分に相当するトゥオルミ水系全体が閉鎖される」という内容が記されていたとガーフィールドは記している (*San Francisco Call*, 26 January 1909: 14)。彼はこれを明確に否定し、さらにこのことをそのパンフレットの署名者であるミューアが知らないわけがないとし、このパンフレットはミューアのあずかり知らぬところで作成されたものと断じた (ibid)。このガーフィールドの指摘が事実であるかどうかを知るすべはないが、国立公園保護協会の運営にミューアがどれほど深く関わっていたのか疑問を抱かせる。少なくともヘッチ・ヘッチイ溪谷に将来にわたってダムが建設されないという、確固たる成果を求めたより強硬な言説が流布しはじめていたことは事実であろう。これ以後、ミューアは聴聞会など公の場に姿を見せなくなっていく。

他方の連邦議会では、1908 年 12 月 16 日にワイオミング州選出のモンデル下院議員 (Frank Mondell) を委員長として、下院公有地委員会が開かれた。年末休暇を挟み翌年 1 月までつづいた聴聞会において、マンソンはサンフランシスコ市を代表してヨセミテ国立公園のヘッチ・ヘッチイ溪谷の土地 500 エーカー余りを市の土地として与えるよう証言をおこない、ヨセミテ国立公園内のダム開発計画地のエレノア湖とヘッチ・ヘッチイ溪谷を開発できるよう主張した。その根拠としてマンソンは、エレノア湖単体では今後 50 年間に予想されている 150 ～ 200 万人の水需要に対応できないと主張した (U.S. Congress, 1909: 98.)。

翌月聴聞会は上院に移された。シエラ・クラブからはジョンソン等が出席し、他にアパラチアン・マウンテン・クラブ (Appalachian Mountain Club) やアメリカ地域移民センターも代表を送ったが、ミューアは健康上の理由から出席を見送った (Righter, 2005: 75-6)。聴聞会の席上、ニューランズ上院議員 (Francis Newlands) 等は、ヘッチ・ヘッチイ溪谷の開発を阻止するという利害の一致点から、溪谷開発の反対者とスプリング・バレー水道社との関係を問い質した。ジョンソンは、その質問に不快感を抱いたというが (Righter, 2005: 76)、しかしオルシは、ミューアと私企業との深い関係性を指摘しており、ダム開発反対運動団体と一部の水道供給会社が共闘関係にあったことは少なくとも否定されるものではない (Orsi, 1985)。また、ライターも開発反対派の決定的な敗因の一つとして、企業との関係を完全に否定できなかったことが大きいとしている。

サンフランシスコ市が溪谷の使用権を得たことは、(…) 私企業から溪谷に対する影響力を低下させたという点で有益であった。サンフランシスコ市が溪谷の使用権を得なければ、同社が早晚権利を得るであろうことは、カリフォルニアの有力者 (*Progressive leaders*) が危惧していたことであつたからである。(…) 溪谷を守ろうとする人々は私企業による水道や電力に関する興味からの共謀の働きかけを回避しなかつたがために、彼らの戦いに決定的な敗因をもたらすことになつた。(Righter, 2005: 6)

しかしこれらの議論にかかわらずウィットマン議長 (Edmund Whitman) は、聴聞会において結論を出すことを断念し、上院がタフト大統領 (William H. Taft) にヘッチ・ヘッチイ問題に関する特別調査委員会を招集することを要請する決議を採決するよう提案した (Jones, 1965: 103)。これは事実上反対派の勝利であつた。法案が議会に送られ採択されれば、サンフランシスコ市の計画が確定したからである。

他方、サンフランシスコでは市民レベルのフォーラムがコモンウェルス・クラブ (Commonwealth Club of California) によって開催され、ヘッチ・ヘッチイの問題は複数の部会で取り上げられた。クラブの会長は、特に重要な事項に対してのみ設置される調査委員会を招集し (Hodghead, 1909)、この委員会は、結論として以下3点の勧告をおこなつた。

- (1) エレノア湖を完全に開発すべきこと
- (2) ヘッチ・ヘッチイは上記の水源が完全に開発された後に使用されるものとする
- (3) キャンプやその他の使用の権利を人々に残しておくこと (Hodghead, 1909)

この結論はもちろん新しいものではない。ルーズベルト政権は同様の妥結案を提案していたし、ミューアもエレノア湖を市に与えることについては好意的であつた。ミューアのように同溪谷の開発を完全に阻止できないまでも、数十年単位でその開発を遅らせることができることにひとまず納得していた人々が反対運動を展開する人々の中にも少なからず存在していた。しかし、聴聞会においてサンフランシスコ市の計画発動をひとまず阻止することに成功したのは、その将来の開発を担保することにも強行に反対するコルビィやジョンソンを中心とした国立公園保護協会とその協力団体の存在があつたからだつた。ガーフィールドの後任の内務長官は、この流れを汲む形でサンフランシスコ市の計画の見直しを迫っていくのである。

3 ボーリンガー内務長官の "Show Cause": ヘッチ・ヘッチイ溪谷への焦点化

1909年10月初頭、ルーズベルト大統領の後を受けて大統領となつたタフト大統領は先の大統領と同様にヨセミテ溪谷を訪れるため、サンフランシスコに到着した。ルーズベルトがミューアに同行を求めたように、タフト大統領もミューアに同行することを求めた。タフト大統領は3日間ミューアと過ごした後、以前から国立公園におけるサンフランシスコの水源地候補地であつたヘッチ・ヘッチイ溪谷をボーリンガー内務長官 (Richard A. Ballinger) が訪れることを知らせ、ミューアにそこへ案内することを提案した (Righter, 2005: 81-2)。これは、就任間もないタフト政権がルーズベルト政権の政策を継承しているというアピールである。

着任して間もないボーリンガー内務長官は、ヘッチ・ヘッチイ溪谷の開発か保護かの判断に対して、世論が彼の決定に注目していることを理解していた。というのも、国立公園保護の観点からサンフランシスコの水源地開発の要請を拒絶したヒッチコック内務長官の判断をガーフィールド長官が覆したように、その時々の内務長官の意向が溪谷の運命を大きく左右したからであつた。そこで、ボーリンガーは、自分がいかなる決定を下そうとも、ともかく時間を稼ぐことで世論の関心の低下を期待したと思われる。この目的のためにボーリンガーは、全米地質調査室のホプソン (E. G. Hopson) とヒス (Louis J. Hiss) に再調査を命じた。この報告によれば、エレノア湖とチェリー溪谷は35万エーカー・フィートの貯水量が想定される。市がより多くを望めば、ヘッチ・ヘッチイ溪谷の下流1マイルにあるポペノウト溪谷にダムを建設することができ、3万エーカー・フィートの水が追加できる。少なくとも今後50年、ヘッチ・ヘッチイ溪谷は使用する必要がないことが報告された (cf. Righter, 2005: 95)。

1910年2月初頭、ボーリンガーはサンフランシスコ市に対して、なぜヘッチ・ヘッチイ渓谷をガーフィールドの許可から削除するべきではないのか理由を示すこと (Show Cause) を求めた (Righter, 2005: 96)。このボーリンガーの判断は、ガーフィールドが示した妥協案から国立公園保護協会の意向をより強く反映させるものとなった。ガーフィールドの下した決定は、ヘッチ・ヘッチイ渓谷の即時開発は認めないものの将来的な開発可能性は認めており、いわばサンフランシスコ市のために留保されるというものであった。しかし、ボーリンガーは、ヘッチ・ヘッチイの開発理由をしっかりと示すことを求め、それができなければサンフランシスコのために留保することも認めないというものだった。これを受けてサンフランシスコの代表者たちは、この理由を示す場として聴聞会の開催を要請し、ボーリンガー長官は1910年5月18日にワシントンD.C.で開くことを決定した (Righter, 2005: 97)。陸軍工兵隊 (Army Corps of Engineers) のエンジニアの予定に合わせる形で、5月26日に延期された後、聴聞会は開始された。聴聞会の結果、ボーリンガー長官はガーフィールド長官による開発許可を破棄したが、エレノア湖とチェリー渓谷におけるサンフランシスコの水利権を認めた (U.S. Congress, 1910: 69-70)。そして当該土地は、ヨセミテ国立公園から除外され隣接するスタニスラウス国有林に加えられることとした (U.S. Congress, 1910: 69-70)。

この時点において、エレノア湖の開発はほぼ確定的であるように見える。しかしボーリンガー長官は、ヒッチコック長官と同様に国立公園は大規模な開発をおこなうべきではないと考えていた。ガーフィールド長官やミューアやオルムステッドたちが認めてしまったが、国立公園が開発されることの意義は大きい。したがって、エレノア湖を国立公園から除外し、ヨセミテ国立公園を無傷で残そうとしたのである。しかし、どういふわけかボーリンガーは、最終的に聴聞会の結論を採用せず、より穏当な判断を下している。彼はサンフランシスコ市当局に対して、ヘッチ・ヘッチイ水源計画の設計をおこなうこととヘッチ・ヘッチイ渓谷の代替地を検討すること、そしてその上で、ヨセミテ国立公園の景観的特色に与える損失を評価し同計画の優位性を示すことを求めた。この決定にヘッチ・ヘッチイ渓谷を守ろうとする人々は大いに失望した (Jones, 1965: 126)。

4 フィッシャーの決断

アラスカの資源の管理をめぐる前の森林局局長のピンショーとの激しい論戦の影響により、体調を崩したという理由で、ボーリンガーは1911年3月に辞職する (Richardson, 1962: 72-84; Miller, 2001: 208-9.)。後任には、フィッシャー (Walter L. Fisher) が着任した。着任まもなく、フィッシャー長官はサンフランシスコの代理人ロング (Percy Long) から "Show Cause" に関する報告書がフリーマン (John R. Freeman) に委任されたことを伝えられた。フリーマンはボストンやニューヨークなどの主要な都市の水道インフラ整備に携わり、パナマ運河の設計にも関わっている人物で、当時の水系エンジニアとしては最高の権威と言える人物だった。そのような権威をサンフランシスコに推薦したのはタフト大統領であったという。先の聴聞会の結論をボーリンガー長官が実行しなかったことを合わせ推察するに、タフト大統領はヘッチ・ヘッチイ開発計画を支援していた。フィッシャー長官は自身がこの問題を熟知するまでの時間的猶予を求め、同長官による聴聞会は度々延期された。そして、その間にサンフランシスコ市はフリーマンが中心となった作成された500頁を超える重厚な報告書を1912年7月15日に提出した (Freeman, 1912)。その後、フィッシャー長官は最終的に同年11月25日に聴聞会を招集し、6日間にわたる証言と議論を開始した。(cf. Righter, 2005: 100)

聴聞会における総ての証言や補足的報告の資料は陸軍工兵隊の顧問委員会 (advisory board) に移され、最終的な報告をフィッシャー長官におこなうこととなった。しかし、この委員会はボーリンガー長官が調査を命じた際に、必要な予算措置が取られなかったことから、サンフランシスコ市がその費用と調査に関連する情報を提供してきた経緯がある (Righter, 2005: 115)。したがって、同委員会とサンフランシスコの癒着構造は、その結論がサンフランシスコの熱望するものとなることを半ば保証しているように捉えることができた (Clements, 1979: 203)。そして、1913年2月13日に提出された報告書は、サンフランシスコ市が提出したフリーマン報告を受け入れるというものだった (Advisory Board of Army Engineers, 1913: 14-5)。

しかしながら、このようにサンフランシスコに有利な報告が提出されたにもかかわらず、フィッシャー長官はガーフィールドの許可を復活させなかった。長官は、彼の在任期間一杯まで結論を先延ばしした後に、すべての結論を

議会の採決に委ねることを結論した。フィッシャー長官のこの決断の理由は、サンフランシスコ市長と議会に宛てた手紙に示されている。

サンフランシスコに申請された権利を与えることを許可しなければならないことは明白であるが、(在任期間中に残された) 時間の関係から許可の細部まで詰めることは不可能である。サンフランシスコ市とその周辺の自治体に対して、ヘッチ・ヘッチィ溪谷をダム用地として利用できる権利を私の権限において許可する証書を作成することができなかったことは、私の在任中の最大の後悔とするところである。しかしながら、この結果は、現行の法制度上の観点からこの許可が内務長官の裁決によって決定すべきではないという私の決断に拠るところである。この(サンフランシスコにダム建設の許可を与えるという)結論は(…) 1901年2月15日の法律が許可する法制上の権限によってのみ裏付けられるものである。(letter from Secretary Fisher to the Mayor and Supervisors of San Francisco, 1 March 1913, pp.5-6, Qtd. Jones, 1965: 150-1)

フィッシャー長官の示す1901年2月15日の法律とは、国有地施設権規定法(the Right of Way Act)のことであり、この法律は電線や水道管などを国有地に施設することを希望する事業主に対して、その公益性や効率性を勘案して、当該地域を管轄する省庁の長官が国有地の利用権を許可することを可能にするものである。フィッシャー長官は、この法律によって示された内務長官の開発認可権限によってサンフランシスコのダム開発計画を承認できるという法解釈に疑問を持っていた。というのも、ダムの建設がもたらす景観上の変化やキャンプ場を追われる利用者の権利等の問題について、内務長官が判断できるという権限の範疇を、同法が明確に規定していないからである。したがって、国有地施設権規定法に拠らず、議会がこの開発問題に責任を持つ判断を下すべきだと考えたのである。

5 真夜中の決着：レイカー法案の成立

聴聞会が終了し、ヘッチ・ヘッチィ溪谷の命運は連邦議会の判断に委ねられた。新たに誕生したウィルソン(Woodrow Wilson)政権の内務長官として、フィッシャーの後任にレーン(Franklin K. Lane)が就任した。彼は、自他共に認めるヘッチ・ヘッチィ開発計画の推進者であった。というのも、レーンは1900年から1903年までのあいだサンフランシスコ市の顧問弁護士としてフェラン市長とともに溪谷の水利権の獲得に務め、同計画の推進に実際に携わった人物であるからだ。しかし、このサンフランシスコの意向に好意的な内務長官によっても、フィッシャー長官の決断によって、計画の是非に対する判断を議会に委ねるという結論は覆すことができなかった。そして、例えレーン長官がヘッチ・ヘッチィ溪谷の開発を認めることができたとしても、ガーフィールド長官の許可の後に提出されたサンフランシスコにダムとダム湖の土地を与えるような法律は、やはり議会で承認される必要があった。フィッシャー長官の考えは、議会がそのような法律を承認するのであれば、内務長官としても同調するというものだったのである。

サンフランシスコ市は同市に国立公園をダム開発の目的で使用する権利を与える法案を起草し、カリフォルニア選出のレイカー下院議員(John E. Raker)が議会に提出した(Clements, 1979: 206-7)。この法案の成立を阻止したい人々にとって、法案の賛同者にケント(William Kent)議員の名前があったことは悪い知らせだった。かつてケントは、貯水池のためにダムが建設される予定であったマリノ郡のセコイヤの森を私費で購入して合衆国に寄付し、後に「ミューアの森」国立公園として保護されるこの地域への貢献によって、ミューアやシエラ・クラブのメンバーに知られるようになったのである(Rothman, 1989: 61-4)。1913年9月3日にレイカー法案は183対43の大差で下院議会の可決を得た(U.S. Congress, 1913a: 4151)。

下院の結果を受けて、上院における法案の可決を食い止めるために、国立公園保護協会はすばやく効果的な運動を展開する必要があった。しかし、この反対運動の精神的支柱とも言えるミューアは、やはり体調面からの理由からワシントンを訪れることは無かった(Righter, 2005: 125)。そこで、ジョンソンが中心となって運動を展開した。彼は、連邦議会議員に対してもっとも効果的な影響を与えるには有権者からの直接の要望であると考え、ヘッチ・ヘッ

チイ問題に対する有権者の意識を喚起するため、新聞紙上で抗議活動を呼びかけた (Johnson, Open Statement August 1st, 1913, qtd. Jones, 1965: 112-3)。

1913年12月1日から6日の日程で上院における議論が始まると、国立公園保護協会によるパンフレットやジョンソンの公開文書は非常に大きな成果を取めたことが明らかになった。複数の上院議員や内務長官のもとに、数千の抗議の手紙が届いた (Albright, 1999: 20)。南カリフォルニア選出のワークス上院議員 (John D. Works) はトゥオルミ川における灌漑用水について議論し、サンフランシスコ市が農家の権利を侵害していると主張した (Righter, 2005: 127)。また、アイダホ州選出のボラー上院議員 (William E. Borah) はワークス議員に続き、サンフランシスコ市が水資源を独占していると主張し、1,000～2,000万ドル費用がかさむが、サクラメント川やイール川やマクライド川からも十分に取水できると主張した (U.S. Congress, 1913b: 290-7)。そして、ノースダコタ州選出のグロナ上院議員 (Asle J. Gronna) はワークスとボラーを支持し、さらに国立公園保護協会の立場から、「神の創りしものを破壊することは間違いだ、それらは二度と作り直すことはできない」と主張した。しかしその日、12月4日はほとんどの上院議員は出席しなかった。そして、ネブラスカ選出のノリス上院議員 (George Norris) は、彼が受け取った5,000通以上の手紙は真の自然愛好家たちからのものではなく、水道や電力に関わる私企業の影響を受けたものであるとした (cf. Righter, 2005: 127-30)。

議論は12月6日に入っても続いたが、議場には倦怠感が漂い、午後の会議では議決の定足数を維持することが難しくなりつつあった。そこで多数の上院議員が投票を求め、午後12時に投票がおこなわれた。結果は、賛成43、反対25、棄権27であり、法案は賛成多数で可決された (Righter, 2005: 130-1)。

6日間にわたって議会のバルコニーで議論の様子を聞き入っていたサンフランシスコの代表団は歓喜に沸いた。ついに勝利を手にしたのである。彼らは周囲にいた人たち全員と握手を交わし、宿泊先のウィラード・ホテルへと引き上げた。オシャネシーは「祝杯をあげよう」と言った。しかしホテルに到着する前に、日曜日になってしまい酒を手に入れることはできなかった。喜びは失われなかったが、やはり少し残念だった。しかたなくよく冷えた水で乾杯したが、それはこの勝利にとってもっとも象徴的な瞬間だった。(Righter, 2005: 131)

国立公園保護協会などの計画の反対者たちは、ウィルソン大統領が法案に対する署名の拒否を望んだが、大統領は1913年12月19日法案に署名した (U.S. Congress, 1913b: 1189)。

おわりに

国立公園にダムを建設する計画が立ち上がってから13年間、そして反対運動が始動してから6年間、この問題はサンフランシスコ湾周辺の住民と全米の自然愛好家にとって大きな関心と呼んできた。しかし、この事例は多くの環境史家が考えていたように、自然保護上の論争でも国立公園の保護をめぐる論争でもなかった。また、巨大資本家から市民を解放するという革新主義の思潮と、自然景観の改変を頑なにこばむ自然保護主義との対立、あるいは「保全」と「保存」という対立でもなかった。というのも、サンフランシスコ市の計画においてヨセミテ公園内に予定されていた2つのダム候補地の内、事業の中止を求める運動が起きたのは、ヘッチ・ヘッチイ渓谷に建設されるものだけであり、エレノア湖に建設されるダムについてはこれといった反対運動は見当たらないからである。また、ダムの功利性に関する論争でもなかった。ヘッチ・ヘッチイ渓谷にダムを建設することの利水面や経済合理性にかかわる点では議論の余地はなかったからである。

この事例で実際に争われたことは国立公園の景観価値であった。ヘッチ・ヘッチイ渓谷にダムを建設することに反対した人々の主張は、ヘッチ・ヘッチイ渓谷のダム化さえ防ぐことができれば、ヨセミテ渓谷の価値は損なわれないということであった。争点は自然景観を改変するという点ではなく、自然景観の価値が低下するか否かという点にあったのである。事実、ダム候補地であったエレノア湖はもともと湖であることから、景観上の変化は明白ではないことは確かであった。すなわち、この景観価値上の議論の中心的な関心は、ダム湖が美しいのかという審

美性にかかわる論点であった。この論点に対して、エンジニアたちが貯水池を湖（Lake）と呼ぶことでその美を示したが、ヘッチ・ヘッチイ渓谷の保護を求める人々はこのエンジニアたちの主張を否定する論拠を提出できなかった。すなわち、その見えざる景観価値論上の違いこそが明確にされるべきであった。

他方、この事例にかかわった歴代の内務長官は、景観価値論とはことなる観点から、この問題にかかわってきた。彼らの関心は、国立公園がダム開発の対象となるべきかという点に置かれた。この点を象徴的に表すのが、ボーリンガー長官のダム建設認可の判断である。ボーリンガー長官は、ヘッチ・ヘッチイ渓谷におけるダム建設は認めず、その代わりエレノア湖とチェリー渓谷の開発を認め、エレノア湖をヨセミテ国立公園から除外する判断をおこなった。すなわち、ダムの必要性を認めつつも国立公園はダムによる開発をおこなうべきではないと考えていたのである。そして、ヘッチ・ヘッチイ渓谷を保護しようとする人々が明確に出来なかった景観価値上の論点を避けつつも、ヘッチ・ヘッチイ渓谷を保護できる見通しを切り開いたのである。

しかし国立公園をダム開発から遠ざけようとするヒッチコック長官やボーリンガー長官の意図とは裏腹に、ヘッチ・ヘッチイ渓谷、エレノア湖、そしてチェリー渓谷は最終的に同時に開発されることが決定されたが、その後の国立公園とダムの関係にフィッシャー長官が果たした役割は大きい。フィッシャー長官は、内務長官の権限において大規模なダムの開発が認められるかどうか、法解釈上の疑問を持っていた。そして、内務長官による開発許可を出さず、連邦議会にその採決を委ねた。その結果、ダムの建設認可は既存の法の運用によるものではなく、サンフランシスコ市の水道整備事業のための個別の立法措置によって、ヨセミテ国立公園の開発が認められたのである。すなわち、それ以後の国立公園におけるダム開発においても、内務長官単独の判断によって国立公園の開発は認可されるべきか、という点について論点を残した結果、公園の開発手順の既成化をまぬがれたのである。

文献

一次史料

Advisory Board of Army Engineers, 1913, "Report of Advisory Board of Army Engineers to the Secretary of the Interior," Washington, D.C.: Government Printing Office, 1913.

Association for Preservation of National Parks, 1909, "Let Every one Help to same the famous hetch hetchy valley and stop the commercial destruction which threatens our national parks,"(November 1909), in William Colby Memorial Library, Box #3, Sierra Club.

Board of Supervisors, 1866, *San Francisco Municipal Reports for the Fiscal Year 1865-6, Ending June 30, 1866*, San Francisco: Towne & Bacon.

———, 1869, *San Francisco Municipal Reports for the Fiscal Year 1868-9, Ending June 30, 1869*, San Francisco: Towne & Bacon.

———, 1874, *San Francisco Municipal Reports for the Fiscal Year 1873-4, Ending June 30, 1874*, San Francisco: Towne & Bacon.

———, 1901, *San Francisco Municipal Reports for the Fiscal Year 1900-1, Ending June 30, 1901*, San Francisco: Towne & Bacon.

———, 1908, *Reports on the Water Supply of San Francisco, California 1900-1908*, San Francisco: Press of Britton & Rey.

Chittenden, Hiram M. ed., 1912 "The Water Supply of San Francisco," Spring Valley Water Company.

Freeman, John R., 1912, "On the Proposed Use of a Portion of the Hetch Hetchy, Eleanor and Cherry Valleys within and near to the Boundaries of the Stanislaus U. S. National Forest Reserve and the Yosemite National Park as Reservoirs for Impounding Tuolumne River Flood Waters and Appurtenant Works for the Water Supply of San Francisco, California, and Neighboring Cities," San Francisco: the Rincon Publishing Company.

Garfield, James R., 1908, "Decision of the Secretary of the Interior Department, Washington, D.C., Granting the City and Country of San Francisco, Subject to Certain Conditions, Reservoir Sites and Rights of Way at Lake Eleanor and Hetch Hetchy Valley in the Yosemite National Park," May 11, 1908, Board of Supervisors, *Reports on the Water Supply of San Francisco, California, 1900 to 1908*, 1908, San Francisco: Press of Britton and Rey.

Hitchcock, E. A., 1905, "Letter of the Hon., the Secretary of the Interior, to the President, denying the application of San Francisco (February 20)," *Reports on the Water Supplies of San Francisco 1900 to 1908*, San Francisco: Press of Britton and Rey.

Hodgehead, Beverly, 1909, "Report of the Hetch Hetchy committee, headed by Beverly Hodgehead, assisted by E. A. Walcott, Frank Adams, and J. K. Moffitt," *Reported to the membership in November 1909*, Commonwealth Club: California.

O'Shaughnessy, Michael M., 1925, "Hetch Hetchy Water Supply, Bureau of Engineering of the Department of Public Works, City and

County of San Francisco, California," *San Francisco Water Supply Pamphlets*, Vol. 1, No. 7, the History Room of San Francisco Public Library.

San Francisco Call, December 25th, 1906.

———, January 26th, 1909.

U.S. Congress, House of Representatives, Committee on the Public Lands, "San Francisco and the Hetch Hetchy Reservoir," Hearings on H.J. Resolution 184, 60th Cong., 1st Sess., December 16, 1908-January 12, 1909.

———, 1910, "Proceedings before the Secretary of the Interior in the Use of Hetch Hetchy Reservoir Site in the Yosemite National Park by the City of San Francisco," Washington: Government Printing Office.

———, 1913a, *Congressional Record*, 63rd Congress, 1st Session, vol.50 (September 3rd, 1913), Washington: Government Printing Office.

———, 1913b, *Congressional Record*, 63rd Congress, 2nd Session, vol.51 (December 5th, 1913), Washington: Government Printing Office.

二次史料

Albright, Schenck, 1999, *Creating the National Park Service: the Missing Years*, Norman: University of Oklahoma Press.

Clements, Kendrick A., 1979, "Politics and the Park: San Francisco's Fight for Hetch Hetchy, 1908-1913," *The Pacific Historical Review*, Vol. 48, No. 2 (May, 1979), pp. 185-215.

Hays, Samuel P., 1959, *Conservation and the Gospel of Efficiency: the Progressive Conservation Movement, 1890-1920*, Cambridge: Harvard University Press.

Huth, Hans, 1972, *Nature and the Americans: Three Centuries of Changing Attitudes*, Lincoln: University of Nebraska Press, p.187.

Jones, Holway R., 1965, *John Muir and the Sierra Club: the Battle for Yosemite*, San Francisco: Sierra Club.

鬼頭秀一, 1996. 『自然保護を問いなおす——環境倫理とネットワーク』, 東京: 筑摩書房.

Miller, Char, 2001, *Gifford Pinchot and the Making of Modern Environmentalism*. Washington: Island Press.

Nash, Roderick F., 1967, *Wilderness and the American Mind*, New Haven: Yale University Press.

岡島成行, 1990. 『アメリカの環境保護運動』, 東京: 岩波書店.

Orsi, Richard, 1985, "'Wilderness Saint' and 'Robber Baron': The Anomalous Partnership of John Muir and the Southern Pacific Company for Preservation of Yosemite National Park," *Pacific Historian* 29 (Summer-Fall 1985), pp.136-56.

Richardson, Elmo R., *The Politics of Conservation: Crusades and Controversies, 1897-1913*. Berkeley: University of California Press, 1962.

Righter, Robert W., 2005, *The Battle over Hetch Hetchy: America's Most Controversial Dam and the Birth of Modern Environmentalism*, New York: Oxford University Press.

Rothman, Hal, 1989, *Preserving Different Pasts: The American National Monuments*, Chicago: University of Illinois Press, pp.61-4.

Taylor, Ray, 1926, *Hetch Hetchy, the Story of San Francisco's Struggle to Provide a Water Supply for Her Future Needs*, San Francisco: Ricardo J. Orozco, Publisher.

Worster, Donald, 2008, *The Passion for Nature: the Life of John Muir*, Oxford University Press.

Dam Debate: Yosemite National Park, Landscape Aesthetics and the Water Supply of San Francisco

MORISHITA Naoki

Abstract:

At the turn of the 20th century, when the municipalities around San Francisco Bay decided to discontinue the supplying of water by private enterprise, city officials and engineers chose two water sources in Yosemite National Park for the municipal water supply. This paper historically analyzes the conflicts over the resulting project to develop dams and reservoirs in the national park. The research results are as follows. (1) The first environmental protection campaigners in the United States were members of nature-lover groups. (2) The people who wanted to stop the dam development in Yosemite National Park opposed it on the grounds that it would spoil a great, natural spectacle, but they did not object to the national park as a dam site. (3) In the end, Walter L. Fisher, the Secretary of the Interior, who had jurisdiction over the national park, refused to let the project proceed by only his authority. In response, the U.S. Congress approved special legislation authorizing the construction of the dams. As a result, it became difficult for succeeding Secretaries of Interior to authorize the construction of a dam in a national park.

Keywords: municipal water supply, Yosemite National Park, environmental protection campaign, spoliation of a natural spectacle, dam development

ダム・ディベート

——サンフランシスコの水源地開発にともなう景観価値と国立公園——

森 下 直 紀

要旨：

19世紀末、サンフランシスコ湾周辺の自治体が、私企業に拠る水道供給の状態から脱却し、公営の水道事業を整備するにあたって、その水源をヨセミテ国立公園に求めた。本論では、このことから発生したダム開発の問題について史的に分析を行う。この分析において明らかとなったことは、(1) アメリカ合衆国で最初の環境保護団体が、自然愛好団体から派生したことである。そして、国立公園におけるダム開発を阻止したい人々は、(2) 開発予定地が国立公園であるということから反対を唱えたのではなく、ダムの開発を含めた使用の選択肢について検討した結果、大幅な自然景観の改変が引き起こされることに反対した。しかし、この問題に関わった国立公園を管轄する内務長官の一人は、国立公園という枠組みを重視し、(3) 内務長官による建設許可が出されることに難色を示し、議会による個別の立法措置という形でダムの建設が承認された。このことによって、歴史的にはその後の内務長官権限による国立公園のダム建設の道を困難にすることに成功した。

